自然栽培パーティ その13

失敗に教えられ、成功にそむかれ

「就労支援やまびこ農苑えぼし」は、
この春に自然栽培をはじめたばかり。
待ちかねた初出荷の七月、
西日本中に降りつづいた大雨が畑を侵し、
畝をくずした。
収穫量も半分。
植えたばかりの大根は根腐れをした。
農業担当の川崎千代子さんはにこやかに言う。
「おかげで水の流れがよくわかりました」。
強がりなのか、本心なのか。
失敗を発見と受け止め、
よろこべなければ農業はやれないのかな。

編集部=文
text by KOTONONE
繁延あづさ=写真
photograph by Azusa Shigenobu

雑草畑、野菜はどこに?

佐世保駅から車で一五分。畑に降りると、突然、空気が変わった。それも、そのはず。そこは、烏帽子岳の中腹。標高三〇〇メートル。棚田だったと思われるその場所は、段々畑として再生していた。職員が着ているオレンジ色のつなぎが緑の畑に映える。

「やまびこ農苑えぼし」は、二〇一八年二月にスタートを切ったばかり。その前一年間を開墾、種蒔きなどの準備に費やした。いま、職員三人、利用者はたった一人。五反の農地に、二〇種類の作物を植えている。

「いま、陸稲を育てているところです」と、職員の川崎千代子さん。さっそく見せてもらおうと、段々畑に降りた。ところが、いったいどれが陸稲なのか、わからない。川崎さんが「これですよ」と手を添えてくれた。それでもいまいち、ピンとこない。だって、そこもかしこも、雑草だらけなのだ。全長一〇センチほどの陸稲の赤ちゃんを、その中からどうやって見つけるというのだろう。細い糸で補助線を引いていなかったら、間違えて踏んでしまいそうだ。川崎さんは、「わたしも、最初はわかりませんでしたよ」と笑った。

「やまびこ式自然栽培」で畑を再生

「ここは、我流栽培の畑なんです。『やまびこ式自然栽培』ですね」と、川崎さん。我流栽培とは、いったいどういうことだろう。「ここでは、自然栽培と自然農の間をとったような栽培方法をしているんです」。自然農とは、作物が育つ環境にできる限り人工的なものを入れないことを基本にした農法だ。施肥、病害虫防除に加えて、除草をしないことも多い。自然栽培も農薬、除草剤、化学肥料を使わないのは同じだが、草取りなど手をかける点では異なる。

この畑はもともと慣行農法の田んぼだった。六、七年間放棄され、粘土質で重い土、人間より背の高い雑草で荒れ果てていた。しかし、手つかずだったことで、農薬が抜け、さらに、開墾からは